

2022年8月14日（日）「御霊による歩み」

ガラテヤ 5:16-18

16 私は言います。霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。17 肉の望むことは霊に反し、霊の望むことは肉に反するからです。この二つは互いに対立し、そのため、あなたがたは自分のしたいと思うことができないのです。18 霊に導かれているなら、あなたがたは律法の下にはいません。

#### 【序論】

あるゴールへ向かって進むとき、アプローチの仕方によっては、それを達成できるかどうかが変わってくる場合があります。私のささやかな経験をお話ししますと、子どもの頃に「弾きたい」と思って取り組んだピアノ曲がありました。しかし、当時の私にはその曲を弾きこなすだけの基礎力がありませんでしたから、音符はどうか読めたものの惨憺たる結果になりました。悪い癖が付いてしまい、その曲は二度と弾けない状態でずっと放置されることになりました。しかし、それから20年以上に亘って基礎練習を続け、その間に一段ずつピアノの階段を登っていきましたら、ある日、以前には弾きこなせなかったあの曲の高さに至った自分に気づきました。そのようにしてもう一度取り組んだとき、無理のない演奏を楽しむことができたのです。

これは一例として挙げさせていただいた経験ですが、同じゴールを目指すにしても、間違ったやり方をしてしまうと、悪い結果に至る事例が世には多くあるでしょう。私たちの信仰生活においても、同じことが言えます。

#### 【本論】

今日の箇所には「肉の克服」という課題があります。「肉」については後で丁寧に説明させていただきますが、ここではひとまず「人の悪しき性質」としておきましょう。自分の嫌なところ、醜くて人に見られたくない部分です。これを克服するために宗教を求める人も少なくないでしょう。自分の隠れたいやらしさや欲望に囚われた状態から解放されたいと内心誰もが願っているはずですが、では、その問題にどう取り組んでいけばよいかというとき、今日の箇所は二つのアプローチを提示しているのです。律法によるか、御霊によるか。両者は同じゴールを目指してはいますが、その過程も結果もまるで違うものとなります。

## 本論 1. 「肉」の問題

私は言います。霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。(5:16)

「肉」(ἐπιθυμία/エピスマ)とは、「願望」「欲求」「熱望」「禁じられたことへの願望」「情欲」などと訳される言葉です。人間であるならば誰もが持っている性質ですが、本来健全であるはずの欲求が罪と結びつくことで、自己中心的な願望へと様変わりするのです。

「一貫して自己を主張し、自分の利益と欲望の充足を求める生き様」(高橋)。性欲は罪と結びついて情欲となる。管理欲求は支配欲へ、金銭欲求は強欲へ、認証欲求は自己顕示欲へと進み得ます。中にはそういう「欲」を隠すことをやめ、開き直ったように喧伝することでYouTubeの視聴回数を稼いでいる人もいます。大儲けしている人がいると「羨ましい」「俺も同じようになりたい」と思う人たちが出てくる。隠し持っていた欲望の火に油が注がれる。卑猥な話を自慢げに話して聞かせる人もいて、それが話題性を呼ぶ。しかしその反面で、そのような様々な欲望に支配された人間の姿を「醜い」と感じているところもある。「汚れ」であることを認識しながら、それを愛するところに身を委ねてしまいたくなる歪んだ欲求があり、その反対側で「汚れ」から目を背けようとする自分もいる。欲望には終わりがなく、どこまで突き詰めたらゴールがあるのか分かりません。いえ、ゴールは存在しないのです。追求しようと思えば、死ぬまで追いかけて続けることができるものです。そのことに気づいたとき、人は禁欲とかミニマリズムへと進み、真に価値あるものだけを求めるようになるかもしれません。人は欲望に支配された状態から目を醒ますと、自分が本来この人生で必要な分以上のものを求めて彷徨い続けていた、道に迷った人生を歩んでいたことに気がつくのです。欲望は人の目を眩まし、迷路へと迷い込ませる。道を見失うということは、神を見失うこととイコールでもある。だから、パウロも主イエスも異口同音に「肉の欲望」言い換えるならば「貪欲」に気をつけるよう注意を促しているのです。

- ・ **そして、群衆に向かって言われた。『あらゆる貪欲に気をつけ、用心なさい。有り余るほどの物を持っていても、人の命は財産にはよらないからである。』**(ルカ 12:15)
- ・ **聖なる者にふさわしく、あなたがたの間では、淫らなことも、どんな汚れたことも、貪欲なことも、口にしてはなりません。**(エフェソ 5:3)

この「肉」という厄介なものを克服し、人間としての徳を輝かせた人生を歩みたい。そのように考える人は、自己啓発に進んでみたり、宗教にその解決を求めるようになるかもしれません。聖書は確かに「肉」の問題を扱っているのですが、注意深いアプローチが必要となります。

## 本論 2. アプローチ① 律法による

順序が逆になりますが、先に 18 節を見ておきましょう。

**霊に導かれているなら、あなたがたは律法の下にはいません。(5:18)**

ここでは「**霊**」(御霊)と「**律法**」が対立的に置かれています。これら二つが「肉の克服」への真逆のアプローチだと言うことができる。

まず「**律法**」によるアプローチから見てまいりましょう。律法については繰り返し学んできておりますが、これは神の聖なる御心であって、人間の正しい生き方を規定するものです。神の基準が文字として示されたのであり、それに適わぬ生き方が罪なのです。さて、この律法は、人間に対して「肉に従ってはならない」と命じてきます。人間が欲望のままに突き進んでいくとき、汚れはどこまでも増幅し、自己追求と自己追求のぶつかり合いで争いが生じ、その陰で傷つく人が出てくるでしょう。だから、この「肉」の言いなりになってはいけないのであって、律法はそれと戦うことを要求してくるのです。

しかし、私たちは経験上知っているはずですが、湧き出てくる欲望に立ち向かおうとすると、それに勝つことは決してできない。欲望の火は消しても消しても燃え上がる。そして、これと自力で戦い続けることに疲れ、終いには諦めてしまう。そのような悪循環を経験してきている人がほとんどなのではないでしょうか。この人間の状態をパウロが見事に言い当てています。

私は、自分のしていることが分かりません。自分が望むことを行わず、かえって憎んでいることをしているからです。もし、望まないことをしているとすれば、律法を善いものとして認めているわけです。ですから、それを行っているのは、もはや私ではなく、私の中に住んでいる罪なのです。私は、自分の内には、つまり私の肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はあっても、実際には行わないからです。私は自分の望む善は行わず、望まない悪を行っています。自分が望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはや私ではなく、私の中に住んでいる罪なのです。それで、善をなそうと思う自分に、いつも悪が存在するという法則に気付きます。内なる人としては神の律法を喜んでいますが、私の五体には異なる法則があって、心の法則と戦い、私を、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのです。(ローマ 7:15-23)

パウロは長年、一人のユダヤ人として旧約律法に忠実であろうとしてきました。この聖なる律法を如何に守り行なうかということを追求め、人々にも教えてきた。しかし、彼はそこに自由を見出すことができなかつたのです。最終的に、律法には人を罪から救うことができないうことを悟りました。律法の限界、律法の欠陥を彼は見出したのです。では、律法には果たせなかつたことを実現に至らせるのは？それが「御霊」であります。

### 本論 3. アプローチ② 御霊による

18 節には、律法に対するものとして「御霊」が登場します。また、16 節でも「**霊（御霊）によって歩みなさい**」と言われていました。これは、13 節で言われていた「愛をもって互いに仕える」生き方だと言うことができます。愛には自由があり、人を欲望の支配から解放するのです。この「御霊」は、人を罪から救い出すに当たって、「肉の欲望を捨てなさい」とは言いません。「それがなくなって聖なる心になったら救ってあげよう」とは言わないのです。私たちの肉が克服されていなかったとしても、無条件に救いを与えることができます。だから、御霊は人に自由を与えるのです。これは、律法の要求に応えようとするアプローチとは真逆です。律法によるアプローチは人間の側の努力を要しますが、御霊によるアプローチは神の側に主導権があり、人間はその働きに身を委ねるだけなのです。まず救いが与えられ、あとは救われた自分の心に住んで内側から変革を起こしていただく聖霊にお任せすればよい。私たちの見るべき所がまったく変わりました。キリスト者はどこを見て生きている存在なののでしょうか。自分の欲望との戦いで躍起になり、もぐらたたきを繰り返す生き方をしている者ではありません。むしろ、内住の御霊がどう自分に働きかけておられるかに思いを潜め、その御霊が思い出させてくださる主イエスの御言葉をじっくりと味わいながら、「ああ、自分はそういう存在になったんだ」と常に思い巡らしつつ生きることなのです。

**だから、あなたがたは行って、すべての民を弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によっ**

**て洗礼を受け、あなたがたに命じたことをすべて守るように教えなさい。**（マタイ 28:19-20）

「あなたがたに命じたこと」とは、山上の説教をはじめとする主イエスの教えの一つひとつであり、このような状況のとき主はどのように行動されるだろうかということを考える力、習慣が与えられます。

**しかし、弁護者、すなわち、父が私の名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべ**

**てのことを教え、私が話したことをことごとく思い起こさせてくださる。**（ヨハネ 14:26）

私たちが見るところが根本的に変わったのです。欲望は、目を逸らそうとすればするほど見えてしまう傾向がある。それを克服するには、見るところを全く変えてしまうこと以外にはありません。罪の赦しを与えてくださった主イエス、その御霊の御業、導きに集中していけばよいのです。

律法と御霊は、ともに同じゴールを目指しています。それは、人を聖なる存在へと造り変えることです。しかし、律法にはそれができませんでした。なぜなら、律法はキリストの十字架を通っていないからです。人を造り変える力は、主の十字架から流れ来るのです。

## 【展開】

さて、最後になりましたが、ガラテヤの信徒たちが何をしようとしていたかを確認しておきましょう。彼らは「御霊による歩み」と「律法による歩み」の両立を試みたのです。

**肉の望むことは霊に反し、霊の望むことは肉に反するからです。この二つは互いに対立し、そのため、あなたがたは自分のしたいと思うことができないのです。(5:17)**

彼らの中では、この相反する二つの力が同時に働いていました。彼らは、完全に御霊の導きに委ねる道を捨て、自力で肉と戦う道を取り入れ始めていた。問題は、この二つの生き方(御霊による歩みと律法による歩み)が本当に両立するのかどうかということです。言うまでもなく、両立は不可能なのです。これら二つのことをやっていくときに何が起きるかという、その人はいつしか神の恵みに頼る道が分からなくなり、救われていることが実感できなくなり、律法の要求に次々と縛られ始めることでしょう。元の木阿弥となってしまうのです。だから、パウロは彼らの状態について「**あなたがたは自分のしたいと思うことができない**」と言っている。つまり、肉を克服したいと思いつつ、結局肉に支配されている。その実態として、19～20節に出てくる「肉の行い」、26節に出てくる「挑み合い」「妬み合い」ということが、ガラテヤ教会内に起きてきていたのでしょう。

## 【結論】

私たちも、ガラテヤの信徒たちが陥っていた状態を「対岸の火事」として見ていることはできません。私たちも同じ状態に戻ってしまっている可能性はいつでもあるからです。自分の生き方をよく吟味してみましょう。罪に支配された状態にないか、律法の要求に自力で応えようとしてはいないか、肉の欲望を払い退け払い退け生きてはいないか。むしろ、私たちは、見るべきところを決定的に変えたい。私たちの内に住んでくださっている御霊の働きに目を向けましょう。この方が自分をどう造り変えてくださるかに期待し、祈りましょう。新しい力によって突き動かされている自分に気づきましょう。それこそが真に肉を克服する道なのです。

## 【祈り】

主よ、人の欲望には終わりがなく、支配され始めるとどこまでも突き進む傾向があります。生きるかぎりこの「肉」は私たちの内側に隠れています。しかし、自らの努力によってそれを捨てることはできませんから、内なる御霊の働きにこそ目を留めて生きていきたいです。御霊の助けによって、私たちが真に見るべきものに刮目して歩み続けることができますように。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
すべての人に「聖なる存在」となることを求め、律法によってご自身の御心を示し給うた、  
父なる神の愛、  
律法を知り、しかしますます「肉」の虜となっていた人類に、御霊による解放を与え給うた、  
主イエス・キリストの恵み、  
聖徒の心を満たし、その働きにこそ目を向けさせ給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。